Emily Brontë の研究
ー焔の意味するものー

宮　川　下　枝

Wuthering Heights に於いては数多くの imagery が用いられており、各々が何等かの意味を持っているとは考えられている処であり、

> It is the aim of this study of the internal organization of a literary work to trace the connection between imagery and idea. (1)

（心象と観念との関連を追及することが文学作品の内部構成についての研究の目標である。）と E. Tn. M. Van de Laar も述べている。特にEmily の愛したヒースの丘をとり囲む自然は彼女に特別の意味を持つものであり，それ等が象徴として用いられていることは既に研究されている通りである。更に Laar の言葉を借りれば，

> Although the creation of literary images postulates a choice of objects and actions, the literary artist should not merely reproduce in words scenes and experiences from every-day life, with the aid of observation and memory; he should produce new images of sequences of images in order to reanimate the emotional forces operating in the reader's mind. (2)

（文学的心象の創造は対象と行動の撰択を必要条件とするのであるが，文学作家は観察と記憶の力を借りて単に日常生活の中から情景や経験を言葉に再生するだけではいけないので，読者の中に働くいろいろな感動力を甦えらせる為に新しい心象，新しい一連の心象を産み出さねばならないのである。）

作家というものは，読者の心の中に活々とした感情をおこさせる為には日常生常の

(1) E. Th. M. van de Laar: The Inner Structure of Wuthering Heights.
(2) E. Th. M. van de Laar: The Inner Structure of Wuthering Heights.

単なる情景や経験だけを描いていては駄目で感情の象徴となるべき新しい象,又一連の象をつくり出さねばならないと云うことであるがその点に関しては，エミリーは非常に新奇な象徴の用い方をしているという点に於いても偉大な作家と云わざるを得ない。

矢本真幹氏は英語青年１９７１年９月号に於いて〝イメージの視点〟なる論説によって次のように述べていられる。

“Image” あるいはその集合としての“imagery”もしくは“image-cluster”が文学批評の対象としてクローズアップされたのは20世紀になってからであろう。寡聞な私の推察である。現代の批評が，“image” をどのように定義するとしても，その根底には外界の事物なり風景なりとにかくもののすがたが含まれている。程度の差はあれ，そういう感覚的なイメージを読者または聴き手の心内に喚起しなければ，文学の作品は読者にうったえるものとならない。イメージというものは文学作品にとって必要不可欠の要素である。これはいうまでもなかろう。それ故，古くから詩人や批評家はイメージの使い方や効果について，意識的にせよ無意識的にせよ，多少の注意を払ってきた。詩人が作品にイメージを考量するのは当然であるが，批評家の評論の中にもイメージへの関心が散見するのである。

エミリー・ブロンテの作品の中に活々としたイメージが用いられていることも，彼女が詩人であったことに起因するものであろう。今回はこのイメージの点，特にその中の一つの焔をとりあげて彼女の作品を捉えてみたいと思うのである。

私もこの春，英文学研修旅行に参加して，夢に迄見ていたヒースの丘を実際にバスで走り抜けることが出来た。読んでいた通り，ヒースの丘とは森も林もなく，只落漠と続く涼々とした平原とゆるいうねりの丘の続きであった。眼を遮ぎるものは何一つないその一連の丘にしがみつく様に丈の低いヒースが繁っている。

遠くから見ると，山焼のあとの黒いこけ肌を見るような不気味な思いであるが，五月ともなればそこ一面に紫の花が咲くそうである。Vining 夫人の文にもその美しさを讃える文があり，英国の代表の花として一つをとり上げるとするならば私はヒースをあげる。というのがあったがここではエミリー自体の文から彼女のヒースの丘に対する陶酔振りを窺うことにしよう。 so we climbed the slope of heath together.
私共はヒースの丘を一緒に登っていった。

(Wuthering Heights Ch. XXVII)

the pure heather-scented air, the bright sunshine, the gentle canter of Minny. (Ch. XXh)

ヒースの花匂う清らかな空気，輝かしい陽の光，ゆっくり駈けるミニイの足並。

In winter nothing more dreary, in summer nothing more divine, than those glens shut in by hills, and those bluff, bold swells of heath. (Ch. XXXII)

丘陵と豪放な素朴な，ヒースの丘のうねりに囲まれたこれ等の谷間は，冬はこれ程淋しい処はない代りに，夏はこれ程素晴しい処はない。

bold swells という言葉が，ヒースの丘の大きなうねり，果しなく続く雄大な自然を実によく云い表わしている。

I ligered round them under that benign sky, watched the moths fluttering among the heath and harebells; listened to the soft wind breathing through grass; and wondered how any one could ever imagine unquiet slumbers for the sleepers in that quiet earth. (Ch. XXXIV)

私は温和な空の下で，それらの墓の周囲をぶらつき，歩き廻って蛾がヒースや桔梗の間を飛び廻るのを見つめ，風の中をそよぐ静かな風音に耳を傾けつつ，この静かな大地の中に眠る人達に対して不安な眠りなど想像も出来ないと思った。

この波乱に富んだ物語をヒースの丘に静かに眠る主人公達に思いを馳せつつ終るところに，如何にエミリーがこのヒースの繁る丘を愛したかがうかがえる処である。

この美しいヒースの丘を想像し乍ら，ここを男の子のような姿で散歩をしたエミリー自身のこと，又小説の中の颯爽と馬を馳せてゆく女主人公たちを心に描いてみたのであった。

Minny and I went flying home as light as air; and I dreamt of Wuthering Heights・・

私はミニイに乗って雲の如く軽やかに飛ぶように家へと走った。嵐ケ丘のことを考えていた。

・・・she ・・continued sauntering on, pausing at intervals to muse over a bit of moss, or a tuft of blanched grass, or a fungus spreading its bright orange among the heaps of brown foliage; and, ・・ (Ch. XXII)

彼女はブラブラと歩き続けました。そして時々立ち止って，一寸した苔や白っぽくなった一株の草や，一かたまりの葉色の葉の間にオレンヂ色の傘を拡げているきのこ等をじっと見入ったりしていました。

I mounted Minny, and urged her to a trot; (Ch. XX)

私は小馬ミニイに乗ると，どんどん早足で駈けさせました。

山あり谷ありの変化に富んだ日本の自然に見慣れている我々には，この単調な広漠たる平原は親しめぬ珍しい光景であった。この中にポツンポツンと廃虚になった農家が見受けられる。屋根が抜け，まわりの煉瓦壁，石壁だけが残り、窓ガラスもこわれてなくなってしまっている廃屋を見ると、エミリーの想像力を刺激してあのような小説を書かせるに到ったのであろうと思わせられる。Wordsworth の Tintern Abbey にも見られる廃虚となった僧院に対する懐しみは，Romanticsm の時代に於いて古いものに対する愛を呼び戻したものであるが，この荒廃した寺院を見る時に感じると同じおもいをエミリーも抱いたのだろう。残念乍ら，私共はバイロンの家を見るのに時間がかかり過ぎてしまってその日の予定に組まれていた Haworth 訪問は断念せざるを得なかったがリードの郊外より Yorkshire 迄続くヒースの丘を飽くことなく enjoy することが出来て，私は物も云わずにその広々とした眺めに見入って何時間かを過したのであった。北部の気候はたしかにどんよりしたものではあったが，私が頭の中で考えていたような暗い陰鬱なものではなかった。ヒースクリフの駈せたと同じヒースの丘を私共のバスもひた走りに走っている。

私は胸の痛くなるようなジーンと来るものを覚え，カメラのシャッターを切るのも8ミリを廻すのも忘れてしまっていた。ここ一杯に紫のヒースの花が開いた時はどのように美しいであろう。私共の旅行中は北部の春はまだ寒く，まだ開花どころではなかったが，南部のキャンタベリー寺院を訪れた時は，この暖い南部では既にヒースの花が咲いており，幸福の花ですよと云って娘さん達が売っていた。小さな一束が5ペンス。私はそれを鼻におしあて，そっと臭いでみた。振ればサラサラと落ちてしまう

小さな花片。その小さな花がかたまって群り咲いている。この自然のままに咲く花が如何にエミリーの郷愁を誘ったことか，ブラッセルからもとんで帰りこの広野の散歩をせずには居られなかった彼女である。

> Charlotte undesrtood very well the neccessity of letting her go home, The change from her own home to school from her own very noiseless, very secluded, but unrestrained and unartificial mode of life, to one of disciplined routine was what she failed in enduring. Her nature proved too strong for her fortitude. Every morning, when she woke the vision of home and moors urged on her, and darkened and saddened the day that lay before her. Nobody knew what ailed her but me. I knew only too well. In this struggle her health was quickly broken・・・(3)

ジャーロットは妹を家へ帰らせることの必要性をよく辨えていた。静かなかけ離れた束縛されぬ家より，その自由な生活様式の中より規律ある生活に入ることは妹エミリーには，耐えられないことだった。辛抱出来ないことだった。エミリーは毎朝眼が覚めると，家の印象が眼に浮び，今日の一日を暗くし，悲しくした。どうしたら元気になれるのか外の人には分らなかった。が，私には分り過ぎる程分っていた。心の苦しみの中に健康はぐんぐん害われていった。

・・・who cannot live outside their own narrow territory. Haworth were a womb. (4)

彼女は彼女自身のせまい領地の外では生きることが出来なかった。ホワースは彼女にとって母なる母胎であった。

このあたりの農家にゆっくり入って見る時間はなかったが，Stratford-on-AvonでShakespeare の生家を訪れた時印象的だったのは，石畳の床を持つ居間であった。大きな背丈よりも高い暖炉が切ってある。この部屋の冷い感じの床の上に立った時私はハタと嵐ケ丘の最初の章を思い浮べた。

---

(3) Margaret Lane: --The Bronte Story

(4) 〃 〃

One step brought us into the family sitting-room, without any introductory lobby or passage: they call it here "the house" preeminently. It includes kitchen and parlour, generally,……I obseved no signs of roasting, boiling, or baking, about the huge fire-place‥ (Ch. I)

一歩踏み入れると，もう家族の居間で，玄関の間も道路もないのである。ここでは，特にこうした処を「家」と呼んでいた。普通台所と客間も含んでいるのだが，…煮たきや焼ものの匂は煖爐のまわりからは流れて来なかった。

たしかに huge 巨大である。人は何人もすっぽりと入ってしまうような大きな爐である。

実際の料理場は奥の方へ移ってしまって，ここはあとのみ残る台所 Kitchen そして又客間である。

この大きな暖炉に燃えさかる火を見つめ乍ら多くの人々の過した場面を嵐ケ丘に移して考えてみた。そこには種々様々の場面が浮んで来る。

In the course of time, Mr. Earnshaw began to fail‥‥He had been active and healthy, yet his strength left him suddenly; and when we was confined to the chimney-corner he grew grievously irritable.

He died quietly in his chair one October evening, seated by the fire-side. (Ch. V)

前には壮健で，活動家だったアンショー氏は急にめっきり体が弱くなって炉側の隅っこにばかり居るようになって来て，ひどくいらいらして来ました。だが十月のある晩火を見つめ乍ら爐ばたに腰を下ろしたまま眠るように静かに死んでいました。

On my second visit, Linton seemed in lively spirits; and Zillah made us a clean room and a good fire. (Ch. XXIV)

私が二度目に訪れた時は，リントンは元気そうでした。そして女中のジラが部屋をきれいにし暖い火をたいてくれました。

暖炉に火を入れて歓迎して呉れる人達。キャシィもこのあたたまりを喜ぶ。今夜のリントンは元気がよい。

"Missis walked in," she said, "as chill as an icicle, and as high as a princess.

And she got a chair for herself, ··Having sat till she was warm,··

(Ch. XXX)

夫リントンを失ったあとのキャシイは寒い部屋での看護に体も冷え切って階下に降りて来るが昂然と胸を張り炉の側へ椅子を寄せて腰を下ろすと温る迄じっと座っている。

He stood on the hearth with folded arms, brooding on his evil thoughts;

(Ch. XI)

じっと復讐を考え乍ら，腕組みをして炉側に立つヒースクリフ。

Mrs. Heathcliff, kneeling on the hearth, reading a book by the aid of the blaze.

勢よく燃え盛る炉の火のあかりで本を読んで炉側に坐りこんでいる Cathy.

Linton sat in the arm chair, and I in the little rocking-chair on the hearth-stone, and we laughed and talked so merrily··· (Ch. XXI)

赤々と燃える炉側の敷石のまわりに居心地よい深々とした椅子に座るリントン，小さい揺れ椅子のキャシイ，だが共に楽しそうな光景である。

···how he could sit a whole evening staring into the fire and dozing.

なんで一晩中，坐った切りでうとうとしたきりで居られるのかしら?

(Ch. XXXII)

書物も読まず何もせず一晩中ずうっと炉側に火を見つめつつ居眠りをするHareton.

By the fire stood a ruffianly child, strong in limb and dirty in girb.

(Ch. XIII)

炉の側に立つきたない着物を着た，だが体つきは頑丈な少年，ヘヤントン。面白い対照である。

南部のロンドンのあたりでは水仙の花が美しく，街路は黄色く色どられていたが，北部，ヨークシァーのあたりは春とは云え，寒くまだまだ火の欲しい時候であった。

実際イギリスの人達は赤々と燃える暖爐の火が好きでどのホテルのホールにも log が燃えて木の香りの漂う親しみのある風景が見受けられた。火がイギリス人達にとって何を意味するか。焔はイギリス人達にとっては何なのであるか。現代の科学的暖房法の発達した時代に於いてさえなお食後の一と時をゆっくり暖爐の側に火に見入

りつつ楽しんでいるイギリス人達にとって，その赤々と燃える火はトロトロとした暖みは又その焔は大いなる慰めなのであろう。火のまわりの石がゆっくりと温められた時は部屋全体が又建物全体がゆったりした居心地のよい暖い部屋になり家になることを考えてみた。

Scott や Byron のような大邸宅では，まるでパイプオルガンのパイプのように屋根から突き出て並んでいる煙突がその家の部屋数を教えてくれる。

「嵐ケ丘」の主人公達もこよなく愛した爐側の生活。人々の心を捉えたこの暖爐の火が又じっと見つめるその焔が何を意味するものであるかを考えることも無駄な労作ではあるまい。

プロットの点からも日付の点からも法律上の知識の点からも總べて書かれたものの内容は，細い緻密な計算の上に立っている時に，エミリーの小説の中に用いる現象も又細い定った意味をもたせ，その一連の現象の中に一連の意味を持たせていることも，疑う余地のないことであることは先にも E. Th. M. van de Laar の文を引いて述べた通りである。その述べる意味も考慮に入れつつ私は私なりにこれから暫く考えてみたいのである。

Virginia Woolf:

There is love, but it is not the love of men and women. Emily was was inspired by some more general conception・・・She looked upon a world cleft into gigantic disorder and felt within her the power to unite it in a book・・・・but "we, the whole human race" and "you, the eternal powers・・"(5)

ウルフは二つの世界の統合である。我々，即ち人類全体とあなた即ち永遠の力(神)との融合であると考え，

David Cecil:

However, its main features are clear enough;

The first is that the whole created cosmos, animate and inanimate,

(5) Virginia Woolf：--The Common Reader

mental and physical alike, is the expression of certain living spiriual principles-- on the one hand what may Called the principle of storm-- of the harsh, the ruthless, the wild, the dynamic; and on the other the principle of calm--of the gentle, the merciful, the passive and the tame. (6)

デービッド・セミルに依れば宇宙は静と動に分れて居り，苛酷な無情な野蛮な動的な世界とやさしい慈愛に満ちた受身的な静の世界に分れており，この二つの世界の統一であると説く。

どの論にもうなずける処があり同意を覚えるものであるが私自身としては〝新生〟の論をとりたい。若い時代エミリーがドイツ語で書いた試作の中心も人生の意味は古い世代を犠牲にしての新生であると書いた〝Butterfly〟という essay がある。この彼女の考え方は終生変らなかったようで，「嵐が丘」に於いてヒースクリフが追い求め得たものは，十八年の長きを費してかち得た彼にとっての新生である。

建設と破壊，愛情と憎しみ，擁護と復讐，ヒースクリフの到達し得たものは，キャサリンによって導かれる新生である。十八年という長い苦しみの時期を通しての悟り。新生の歓び，これこそが，エミリー・ブロンテの伝えんとするものに外ならない。

I'v done no injustice, and I repent of nothing. I'm too happy; and yet I'm not happy enough. My soul's bliss kills my body, but does not satisfy itself.〟 (Ch. XXXIV)

わしは何も悪いことはしていないよ。何も後悔はせん。わしは今，幸せ過ぎる程だ。だが幸になり切ってはいない。霊は喜びに満ち，私の体は死んでいく。あと一歩で満足しきるところだ。

Robert C. Mckibben: --

the attraction between Catherine and Heathcliff. …she consciously strove to assert the triumph of society in the love of the second Catherine and Hareton. If the problem of escape or〝breaking-through〟functions in terms of certain poetic figures, the theme of reconcilation must be operative in other image. (7)

---

(6) David Cecil; -- Emily Bronte and Wuthering Heights

ヒースクリフとキャサリンの愛。この二人の愛は次の世代のキャシイ，ヘヤトンの愛の世界に於いて勝利を得るように作者は骨折っている。不和がおこれば和解もなされなければならぬ。即ち，〔 彼は未完成の愛の完成であると説く。

甦えりのキリストの声を聞き続けたキリスト教徒にも似た姿をヒースクリフの中に見出すのである。キャサリンは彼にとって生命ある魂である。「君は峯の桜か谷の百合か。うつし世にまがいもなし」慕い続けるヒースクリフにとってキャサリンは「わが霊の慕いまつる」ものであって，彼を新生えと導く憧れのものである。この小説の目標自体が新生であると共に主人公たちの小さな行動の一つ一つにも常に古き我をかなぐり捨てて新しい自個に生きようとする決断があり，勇気がある。その行動が常に焔の中に何かを投げ入れるところに，焼き捨てるところにその決断が見られるのであると私は考えるのである。

ではいよいよ私の捉えんとする焔と決断なる箇所にふれてみたい。

この場合，爐の火をゆっくりと親しみ，楽しむだけの場面はさておき，激しい決断のシーンだけを取りあげて古い我との訣別の箇所だけをとり焔の持つ意味を考えてみたい。E. Th. M. van de Laar に依れば火は

Lockwood にあっては創造的な精神的な力

Ellen Dean にとっては生活の中心

Joseph にとっては生活の歓び

Hindley にとっては破壊を意味し

Catherine にとっては彼女の精神力そのもの

Heath Ciiff にとっては怒りと激情

Cathy にとっては犠牲を意味するものだと説明されている。

1. Lockwood : Fire is not submissive, but creative, expressing physical or spiritual energy.
2. Ellen Dean: fire is the centre of life at Wuthering Heights.
3. Joseph : His idea of perfect contentment is composed of three things; a good fire…
4. Hindley : Hindley's paradise on the hearth has changed into a hell, a

(7)Robert C. Mckibben : The Image of the Book in Wuthering Heights

place of cruelty and terror.

5. Catherine : Fire, lightning are the symbols of enery, creative force, intensity of passion.

6. Heathcliff : many of his expressions of anger and passion are derived from the fire and its qualities.

7. Cathy : Fire especially is a symbol of immolation. (8)

ところで私は先にも述べた通り，古き我を捨て新しい自分に活きようとする時の決断のシンボルであると解するのである。肉体の弱いエミリーが自分の体に鞭うちつつ，立ち上った時，自個の信ずる姿をヒースクリフを通して描かんとした時，あらゆる主人公に古い過去の自分を捨てさせようとする彼女自身の決断の姿が見受けられ，作者自身が躍如としているのを感じるのである。

代表的な場面をとり上げつつ，その主役達の決断の姿を追ってみたい。但し私の取り扱う場面は，静かに爐の火を眺め入っている静の姿ではなく，この主人公達が焔の中に物を投げ入れる時の光景である。そして彼等はそのメラメラと燃え上る火を種々の感動をもって眺め入り新たに決意をする様が想像出来る。

(1) Catherine の場合

He tried to wrest the key from Catherine's grasp, and for safety she flung it into the hottest part of the fire;‥ (Ch. XI)

キャサリンの握りしめた手の中から鍵をもぎ取ろうとしました。が，キャサリンは燃えさかる炉の中にこれは大変と鍵を投げ捨ててしまいました。

ところで私は先にも述べた通り古き我を捨て，新しき我に生きようとする時の決断の象徴と解するのである。肉体の弱いエミリーが自個の体に鞭うちつつ立ち上る時，自分の魂を動しつつ立ち上る時，その姿はヒースクリフを通し，キャサリンを通し，ネリーを通しイザベラ，キャシイを通して、燃えさかる焔へ物を投げ入れる姿としてえがかれ，勇気を鼓しての決断の姿としての作者自身が躍如としているのである。

では，代表的な場面をとり上げつつ主役達の決断の姿を追ってみたい。メラメラと

(8) E. Th. M. van de Laar:--The Inner Structure of Wuthering Heights.

燃え上る焔を見乍ら彼，彼女たちが感じるもの，又我々に訴えるものを考えてみよう。静かに眺め入る静的な火よりも赤々と迫力のある燃え上る動的な火の場面を捉えよう。David Cecil も指摘するように

> She felt nature to be the expression of a living force, and she makes us feel it too. Her background is no still-life composition; it is a moving picture of an animate being. (9)

火も亦生きているものなのである。

もともと社会的な地位，富，美貌に魅かれてエドガーと結婚したキャサリンは，自分の真の愛情のあり処を探ることが出来ず，若さのままに真価を堀りあて得ずに，Thrushcross に嫁いで行ったのであるから，表面的には穏やかで平和な生活も本当の意味での充実した生活ではあり得ない。帰って来たヒースクリフが現れて，彼の決意のほどを知らされ，自分の徹底しなかった生活態度の不完全さを知り，新しい生活態度に生るべきだとの決心をする。自分の本当の感情をぶちまけ，ヒースクリフの真意を知ることこそ正しい勇気であると考える。古い自分はかなぐり捨てねばならぬ。表面の平和だけに固執してはならぬ。たとえ波紋はおこっても勇気を奮いおこさねばならぬ。彼女はエドガーにもぎとられまいと Key を hottest part of the fire，火の燃えさかる只中に投げ入れてしまう。古き我えの決別を意味する。

但しこの鍵はエドガーが灰の中に手をつっこんで拾い上げているのだから彼女が完全に新しい行動に出ることは阻まれたにせよ，彼女のあの臨終のヒースクリフにむかって吐く勇気ある言葉，これは，この決断の動作を基にしておこっているのだと考える。

"You and Edgar have broken my heart, Heathclif! And you both come to bewail the deed to me, as if you were the people to be pitied! I shall not pity you, not I. You have killed me--and thriven on it, I think …Will you be happy when I am in the earth? ‥I loved her long ago, and was wretched to lose her; but it is past. (Ch. XV)

あなたとエドガーが，わたしにこの悲しみを与えたのですよ。ヒースクリフ，それなのに，自分達の方が可哀そうなのだというような顔をして二人とも私の前に歎きに

(9) David Cecil : -- Emily Bronte and Wuthering Heights

来るのでしょう。気の毒とは思いませんわ。あなた方は私を殺したのよ。そして元気になっているのよ。私が土にかえったら，あなた方はお幸わせ？ 何年か前に彼女を愛したっけ。失った時は惨めだった。だが過ぎ去ったことだと仰っしゃるでしょう。

一旦決意したキャサリンの言葉は強くヒースクリフの心をゆさぶり動かす。この自分に決断を下して新しく生きた最後の瞬間の彼女の言葉は，ヒースクリフの心にも伝わり，彼も亦彼女の得たものを求めて新しい境地へとゆかせられるのである。

(2) Isabella の場合

嵐ケ丘から息せき切って Grange にかけこんで来たイザベラは，ヒースクリフの虐待ぶりを遂一ネリーに話す。そして最後に「こんなものは要らない」と engage ring を燃えさかる焔の中に投げ捨ててしまう。父母の庇護のもとに深窓に育ち両親の死後もあり余る財産の中に苦労知らずに成長したイザベラは，ヒーフクリフの求愛を復讐の手だてとも知らず見抜く力もなく云い寄られるままに相手の男性的な容貌に心惹かれて彼と駈け落ちをし兄の許さぬ結婚をしてしまう。だが嵐ケ丘に帰ってからの生活は彼女が夢みていたような甘い新婚ムードどころではなく彼の寝室にも入れて貰えないようなひどい生活を強いられる。召使からは馬鹿にされ，惨憺たる生活に耐えかねて，この愛のない生活から遁れるべく，嵐ケ丘を駈け出して来る。自分の育ったなつかしい Thrushcross Grange は魅力一杯のところであるが、又赤々とだんろの燃える居間は寒さに震えて来た身には立ち去る気にもなれない処であるが，イザベラは自分の子供はヒースクリフの眼の届かぬ暖い南の地で産まなければならないと決心する。「南へ行こう。一人で」これは何不自由なく育って来た娘にとっては，一大決心である。彼女は指から婚約指輪をはずすと，燃えさかる暖爐の中に投げこむ。「こんなものは惜しくもない」

"Oh, give me the poker. This is the last thing of his I have about me:" she slipped the gold ring from her third finger, and threw it on the floor. "I'll smash it! "and then I'll burn it and she took and dropped the misused article among the coals. (Ch. XVII)

あ，火かきを貸して頂戴 あの人のもので私の持っているものはこれが最後よ。指から金の指輪をはずすと，床に投げつけた。「こなごなにこわしてやる。それから燃

してやろう」と云って指輪を拾い上げると，その酷使した指輪を石灰の燃える中に落しました。

気を付けて読まねば読みおとしてしまう位淡淡と書かれている文章であるが説明を入れて書かぬところがエミリーの文の特長である。だがその簡単な文の中に，古き我より新しき我えの新生を訴えているのは，赤々と燃える焔の力によるのであろうか。

(3) Cathy

She sprang at her precious epistles, but I held them above my head; and then she poured out further frantic entreaties that I would burn them… "We don't send playthings." cried Catherine, her pride overcoming her shame. ….

"I promise, Ellen !" she cried, catching my dress. "Oh, put them in the fire, do, do ! (Ch. XI)

彼女は大切な手紙の束にとびつくのですか。私は頭上高くかざしました。私が燃やそうとするので，彼女は気狂いじみて懇願しました。

"おもちゃ等，送りません" と叫びましたが，誇りを傷つけられ恥も忘れて「約束してよ。エレン」と私の着物を掴むと叫びました。「いいから燃やしちゃいなさい」「さあ，いいから」

私が一番心惹かれる場面であって，自分に打ち勝とうとする決心を心憎い迄に感じるところである。意地悪く見えるネリーにこれでもか，これでもかという程抑圧されているだけに，殊更にキャシイの健気さが対照的に際立つのかも知れない。母の死後広い Thrushcross の邸の中で一人子としてエドガーに大切に育てられたキャシイは兄弟の味を知らない。

南部よりリントンの連れ帰られるという報は夢のような歓びであったのに，無惨にもヒースクリフは自分が父親であるとの理由によって速刻に嵐ケ丘に連れ帰ってしまう。そのような仕打に Edgar Linton が黙って耐える筈はなく当然二人のいとこ達の交際は禁止されている。血のつながるいとこにも容易に逢えないし，幼い Cathy は嵐ケ丘には近寄らぬよう注意深く育てられているのであるが血は争えないもの，年頃

になって来た Cathy は何故か嵐ケ丘へと心ひかれて自然に Peniston Crag の方へと足がむき或日突然しりごみするネリーを引っぱって無理矢理に嵐ケ丘に出かけ，その後今度はヒースクリフの上手な誘いを受けて出かけ，そこで逢った青年がいとこのリントンであると知る。でもこれは父 Edgar Linton へは内緒の出逢いである為，勿論公然とした交際は許されていない。が，秘かな文通が続いているのにそれさえネリーに見附けられてしまってこの結果である。「燃しておしまいなさい。でないとお父さまに云いつけますよ」と命令するネリーは実に残酷で，内緒で Cathy のお伴をした責任は何処でとろうとするのであろうかと軽蔑さえ感じるのであるが，この冷い厳命をするネリーと抵抗を試みつつもそれに従う Cathy の態度とは私には二人の人間の行動とは考えられないのである。

But when I proceeded to open a place with the poker, the sacrifice was too painful to be borne. She earnestly supplicated that I would spare her one or two.

"One or two, Ellen, to keep for Linton's sake !"

I unknotted the handkerchief, and commenced dropping them in from an angel, and the flame curled up the chimney. (Ch. XXII)

私が火かき棒で場所をこしらえようとすると，彼女にはその犠牲が余りにも苦痛で堪えられませんでした。一つか二つは残しておいて頂戴と熱心に叫びました。

「ねえ，エレン，一つか，二つね。リントンの為にね」私はハンカチをほどき，手紙を隅の方から中へ落し始めました。焔はめらめらと煙突えと燃え上りました。

遂にネリーは暖爐の火をかき立て，燃やす準備をする。これは Cathy には耐えられないことであり，一つか，二つは残しておいて頂戴と頼む。ネリーは手紙の包をほどくと，火の中に手紙をパラパラと落し始める。焔が渦を巻いて煙突へと昇ってゆく。半分だけは残しておきたい，二つだけは，せめて一つだけはと願う切なる思いも皆しりぞけてメラメラと燃してしまう。これは決して二人の人間の心ではないと考える。諦めなければならないことは自分にもよく分ってはいるが諦めきることは出来ない。でも勇気を出して諦めよう。でも，ほんの一部か二部かは心の思い出としてそっと大事にしておきたい。それは誰もがもつ思いであろう。だがそれは許されることではない。勇敢にも全部を思いきらなければならない。"いいえ，いけません。全部を燃や

してしまわねば″と火にくべる，ネリーのやり方は，これは自分自身に対して残酷にならねばとうていさっぱりと諦めきることは出来ぬ弱い人間の姿，自分と闘争して決意をする人間の心を二人の人間の姿を通して描いたものだと考えるのである。だがCathy は自分の心に命じて燃してしまった後も立ち昇る焔を見ていると惜しくなってしまって，「いぢ悪，一枚だけはとっておいてもよいでしょう」

"I will have one, you cruel wretch !" she screamed, darting her hand into the fire, and drawing forth some half-consumed fragments, at the expense of her fingers. (Ch. XXII)

指をやけどし乍らも焔の中から掴み出そうとする。決心してもなお，たゆたう人間の心理将態が実に巧に描かれている。「ええ，よござんすよ。お父さまにお見せしましょうね」

作者自身も述べているように immolation 犠牲の姿であろう。

たたみかける意地悪いネリーの返答は更に残酷に云いきかせる人間の決意である。遂に immolation は終った。It was done. と書かれている。

I stirred up the shes, and interred them under a shovelful of coals; (Ch. XXII)

黒い手紙の束はやがて灰となる。私はその灰をかきよせたとある。姉シャーロットの妹に対する批評にも妹エミリーは弱い自分の肉体に対して実に残酷であった。鞭打ち鞭打ち，立ち上ったのである。と記してある。

on hereself she had no pitty, the spirit was inexorable to the flesh; (10)

自身に何の憐のないことだった。その魂は肉体に対して残酷だった。

その間の事情はこの二人の一見意地悪く見えるネリーとそれに泣き泣き従う意地められているように見える Cathy との間に実に見事に描かれていると思うのである。エミリーは自分の肉体だけではなく自分の魂に対しても残酷であらねばならなかった。ブラッセルからホームシックになって来た彼女は姉からも離れた今，自分で立ち上らねばならなかったのである。古い自分を捨て去って新しい自分に立ち上ろうとする時自分に甘えていることは許されないのである。一見残酷にも見える自個えの厳しさ，これでもかこれでもかという程自分自身を鍛え，新しい我を闘いとらねばならない。

(10) Editor's Preface by Currer Bell

まして Cathy の場合，おもう人を諦めねばならないのであるからそれには数倍の勇気が必要である。いぢめるネリーと，いぢめられるキャシイ，両者一体となっての新しい自個確立の様は焔を通して見られるのである。焔を見つめる姿の中に Cathy を見又エミリー自身を見出すのである。

E. Th. M. van de Vaar は，この場合を子供よりの脱皮 a definite leaving behind of childhood. と解しているのであるが，私としては飽く迄も古き我よりの新生と解したいところである。

(4) Hareton の場合

He began to teach himself to read once ; and because I laughsd, he burned his books, and dropped it : was he not a fool ?" (Ch. XXXII)

彼はいつか自分で勉強を始めたのよ。でも，私が笑ったものだから本を燃しちゃったの。勉強を止めて馬鹿じゃないかしら？

書物を火に投げ入れるヘヤトンの姿は何を意味するのであろう。暫時の結婚生活であったが夫リントンを失ってからは，キャサリンはヒースクリフの命により嵐ケ丘にそのまま残っていなければならぬ若い未亡人であった。彼女の心が，除々に若い逞しいヘヤトンに惹かれ，又ヘヤトンが美しいキャシイに憧れていくようになるのも同じ屋根の下に居れば当然の成りゆきであろうが、この二人が素直な気持で愛し合うようになる迄は相当の時間がかかり、反撥し合う若い魂はなかなか相寄ろうとしないのである。書物の好きな家庭に育った Cathy は読むことを知らぬヘヤトンを軽蔑する。だが彼に興味を持ち始めてからの彼女は書物によって彼の心を惹こうと技巧をこらすようになる。

…expressing her wonder how he (Hereton) could endure the life he lived-how he could sit a whole evening staring into the fire and dozing. (Ch. XXXII)

一晩中火の側にいて火を見入りつつ，うとうとしていたりして，そんなことが出来るのか不思議で仕方ないわ。

He began to teach himself to read once; and because I laughed, he burned his books, and dropped it: was he not a fool ?" (Ch. XXXII)

ヘヤトンが書物を火に投げ入れて焼いてしまったと簡単にしかここでは述べられていないのであるが，無学な自分を焼き捨て，新しい智識を身に付けた新しい自分になりたいとの決意の程と解したいのである。

但しこの書物を焼く場面は Robert C. Mckibbem の論文に於いて，二つの世界の Thrushcross Grange（静の世界）と Wuthering Heights（動の世界）との融合を示すものであるとの興味深い解釈の仕方もあるので，この場面の私なりの解釈はこの位に止めておきたい。

このように考えてみると Emily Brontë の作品には火にものを投げ入れる場面の何と多いことだろう。主人公自身が両キャサリンの形をとって示す如く非常に激しい火のような性格をもった女性だからであろうか。私共から見れば大変乱暴な不作法な行動のように思われるが英国に於いては別に荒々しい行動でもないのであろうか。

さて最後に Heathcliff に於ける焔との関連を見附け出さねば片手落ちのような気がするのであるが，荒々しい Heathcliff であるにも拘らず彼の中には火の中にものを投げる動作はないようである。彼の十八年間に亘る努力の末の遂に得ることの出来た新生であれば何かを燃やして，さっと決断をするというような生やさしいものではないのであろう。だが彼の到達し得た新生への悟りは暖炉の側であるからその箇所を拾って考えておこう。

He was leaning against the ledge of an open lattice, but not looking out; his face was turned to the interior gloom. The fire had smouldered to ashes; ····　　(Ch. XXXIV)

彼は格子扉を開けた窓の棚のところにもたれていましたが，外を見ては，いませんでした。彼の顔は薄暗い室内に向けられていました。炉の火はいぶったまま灰になっていました。

"I shall have that home. Not because I need it, but, -- He turned abruptly to the fire, and continued, with what, for lack of a better word, I must call a smile-- "I'll tell you what I did yesterday ! (Ch. IX)

Mr. Heathcliff paused and wiped his forehead; his hair clung to it, wet with perspiraton; his eyes were fixed on the red embers of the fire; (Ch. XXIX)

これを（キャサリンの肖像）を家へ持って帰ったよ。要るからではないがね。と突然彼は炉の方へむき直ると何とも云えぬ微笑とでも呼ぼうかニタリと笑うと「昨日何をしたか教えてやろう」と続けた。

ヒースクリフは一休みすると額をふいた。髪の毛が汗で濡れてピッタリと額にくっついていた。眼は真赤な石灰の燃えおきを凝視していた。

このあたりに見られる焔の描写はヒースクリフもまだ活力のあった頃であるから返逆的に活々と描かれている。

だがこの最後の場面に於ける

ヒースクリフの悟りこそは長年の歳月を経て到達し得たものだけに，ゆっくりと炉側に腰をかけての回想であり，告白であってよいのではなかろうか。彼の得た新生は彼に最もふさわしい情景で描かれている。静かに焔を見つめ乍らの話し振りこそが最も適切である。

I tell you I have nearly attained my heaven; (Ch. XXXIV)

「わしはもうわしの天国に手のとどく所に居るよ」ともう眼前に見える自分の新生を Nelley に告げる時彼からは総べての復讐の念も怒りも消え燃えさかる焔もおさまり，火もくすぶってやがて灰になっていく。という細い書き方が実に面白いではないか。又意味深いものではないか。

以上考えて来たように焔は新生を意味すると解釈する時，エミリーブロンテの求めて止まなかった永遠の愛。新生が，火焔というよき象徴を得て，如何に巧に表現されているかその力強い表明の仕方に感嘆するものである。

"My love for Linton is like the foliage in the wood."

私のリントンに対する愛は木の葉のようなもので冬になると枯れて散ってしまうと云ったキャサリンの言葉は，寒々と聳える葉脈だけのような冬の英国の木々を見ていると沁々と実感が湧き，はじめてその感動が伝わって来る。深い感動を読書に伝える為には活々とした具象を求め，鮮やかな印象を読者の心にかき立てたところにエミリーブロンテの作家として又芸術家としての巧妙さが存するのであると心からの喝采をおくるものであります。

文　　献

Wuthering Heights
The Modern Library : New York　　Emily Bronte

Wuthering Heights
The World's Classics　　〃

Wuthering Heights　　〃
研　究　社

A Wuthering Heights Handbook
The Odyssey Press. New York　　Lettis and Morris

Critics on Charlotte and Emily Bronte
George Allen and Unwin LTD　　Judith O'Neill

The Brontë Story
Heinemann　　Margaret Lane

The Genesis of Wuthering Heights
Hong Kong University Press　　Mary Visick

The Inner Structure of Wuthering Heights
Mouton　　E. Th. M. van de Laar

The Three Brontë s
Kennikat Press　　Sinclair

英語青年　　1971年9月号